鳥取港

鳥取県県土整備部空港港湾課

〒680－8570　鳥取市東町1丁目220番地
☎0857－26－7380（直）
URL：https://www.pref.tottori.lg.jp/kouwan/

1. 概況

鳥取港は鳥取県東部にある鳥取市街地の北西6キロ、一級河川千代川の河口に位置している。かつては賀露港と呼ばれ、古くから朝鮮半島・出雲・隠岐・但馬方面などとの交通の要衝として発展してきた。

近世は、鳥取藩池田家32万石の城下町として繁栄すると共に、賀露港には商船や漁船といった中型船が入港し、明治17・18年には釧路開拓団が出港している。明治・大正は、賀露港の主だった修築はなされず、在来施設の機能を維持する程度にとどまった。

昭和に入ると、千代川の改修工事が本格的に進展し、河口処理問題が検討される中、昭和28年には地方港湾として指定され、漁船を対象に防波堤や物揚場などの港湾施設の整備が始まった。しかし、河口港であり、洪水・波浪等によって港口の広さ・形・位置がしばしば変化するような状態であったため、常に港湾機能が阻害され、発展は妨げられてきた。

昭和30年代後半から40年代にかけての産業経済の発展と、社会基盤の整備・陸上交通体系の確立は目覚しく、日本海の対岸貿易が叫ばれるにつれて、県東部の海上交通の立ち遅れが目立ち始めた。そのような中で、鳥取港の整備拡張の要請がにわかに高まり、昭和44年に「鳥取港整備・千代川河口処理促進期成同盟会」が結成された。県においては、鳥取港の将来計画についての具体的な検討が開始され、建設省においても、千代川河口処理について調査検討が開始された。昭和49年には千代川河口付替事業に着手し、昭和58年に港湾と河川の分離が完了した。

また、鳥取港は昭和50年4月に重要港湾の指定を受け、昭和51年3月に最初の鳥取港港湾計画を策定した。本港はこの計画に基づき整備が進められ、昭和52年4月から運輸省直轄事業による第1防波堤の建設が着手された。

平成2年には10,000トン岸壁1バース、5,000トン岸壁3バース及び危険物用地を有する千代地区が供用開始した。また、同地区には25トン吊荷役クレーン1基及び上屋2棟も整備され供用している。

平成11年5月に千代地区において、海洋レクリエーションの需要に応えるべく、プレジャーボートの係留施設である賀露地区ボートパークが、6月には漁業関連機能の充実を図るため整備してきた西浜地区が供用開始された。西浜地区の漁獲は、松葉がに、ハタハタ、カレイ、シロイカ、モサエビなどが名物として挙げられ、特に松葉がには冬の味覚の代表として全国的に知られている。また、平成14年11月に海鮮市場『かろいち』、平成15年8月には、かにを中心とした体験型施設『とっとり賀露かにっこ館』がオープンし、西浜地区全体が賑やかさを増している。

平成16年1月には『鳥取・賀露みなとオアシス』に登録され、地域交流の拠点として位置づけられた。地元NPO団体を中心とした港の活性化が進められ、夏祭りやヨット・カヌーを利用したクルージングのイベントといった、地域住民が主体となった地域振興活動を行い、賑わい創りの大きな役割を担っている。

平成16年8月には、海洋レクリエーションの需要に対応可能な千代ボートパークが供用開始し、プレジャーボートの収容可能隻数が大幅に増大した。

平成19年6月には耐震岸壁が整備され、大規模地震災害時における緊急避難及び緊急物資輸送等を効率的に行うことが可能となった。現在は、更なる機能強化に向けて、新たな港湾整備に取り組んでいる。本港の取扱貨物量は、平成11年には目標貨物量の160万トンを突破し、平成12年には過去最高の174万トンを記録した。平成13年以降は公共事業削減の影響で取扱貨物量（主に建設資材）が徐々に減少し、40数万トンで推移していたものの、平成27年には72万トン、平成28年には71万トン、平成29年には80万トンを記録し、平成30年には63万トン、平成31（令和元）年には54万トンと推移している。

現在、本港の取扱貨物はピークと比べ減少している状態であるが、中国や韓国などの環日本海諸国と距離的に近く、また、令和元年5月には、山陰道の鳥取西道路が開通し、さらに山陰近畿自動車道福部～鳥取間のルートが令和元年12月に公表となり、鳥取港近隣にインターチェンジを整備する計画が示されたことから、物流拠点としての役割が今まで以上に期待される。また、鳥取港振興会を中心としたポートセールスにより、クルーズ船の誘致活動にも力を入れており、平成20年以降の寄港回数16回の成果を挙げている。本港が海陸交通の結節点及び地域活性の核となるよう、一層の利用促進を図っていく。